

先日、東京電力・福島原子力発電所の事故後の出来事として、精神病院の問題がNHKから放送されました。このとき、四、五十年前頃と現在の精神病患者さんの入院についての問題が報告されました。

当時、私は福島県の病院に勤務していました。このとき一緒に働いていた方の一人が松本総婦長でした。その松本さんから、お便りをいただきました。次に掲載させていただきます。

清水允照

松本マサヨ総婦長からの便り

立春とは申せども、まだまだ寒さがあります。

去る二月三日、NHKのETV特集を拝見いたしました。院長先生も取材を受けられたのですね。私もその前後かは存じませんが、取材を受けました。

清水先生が就任された頃の入院患者数は百四十五名位だったでしょう。ご多忙、ご苦労も多々あった事でしょう。当時Drは一人、Nsは十名位、日勤者

四〜五名、就職されても僅か一週間〜一か月未満で辞めてしまふ。当初、私は病棟の責任者、その任も重く、スタッフに欠員があればフォローせざるを得ません。家庭持ちの私は、家庭が邪魔にさえ思える時期もありました。弱音を吐いている場合じゃない。主人の協力を得て事なきの日々、業務に没頭する。そうした中に清水先生が就任され、安堵しました。

前者のDrとは異なり、処方調整、薬づけから解放されました。副作用も軽減、表情にゆとりも見られ笑みが見られた。無表情だったPtが自ら話しかけて来る。今迄は薬で抑制されていたんだなあと胸の詰まり、心の安らぎを痛感する。清水先生に感謝感謝。患者さん方もそれに感じていた事でしょう。

ある時、先生は問題のある患者さんを院外にて精神療法を行って下さっている様子。その成果は目に見えて：ある時は患者へ患者さん同伴にて家庭訪問された。家人は患者さんを入院させたまま、面会を要請しても無

視状態だった。先生の説得により、しばらくして面会可能となる。先生の熱意に家人の偏見さも徐々に改善され、疎通性も良好となり、治療の効果も目に見える様な状況に至りました。スタッフも皆、清水先生の治療方針に感銘、その寛容さに心を打たれました。

先生は患者さんからも尊敬されておった様でした。さすが清水先生は素晴らしい精神科医、尊敬するばかりです。清水先生の就任中に退院された患者さんは三名位だったかと思う。寛解状態にある患者さん二十四、五名は地元の養鶏所へ。どこか喜々として、日々問題もなく連日頑張っていた。社会に目を向け、希望を持ち、心に灯を抱いている様子が伺える。時には私の所へ相談にやつて来る。つまり退院の話になる。作業への持続性、必ず結果がついて来る事を話し、焦らずDrを信じ、将来の生活設計を夢見、希望を持って頑張ろうと悟す。面会にやつて来た母親が、ある時、随分と良くなったなあと喜びを隠せ

なかった様で、患者さんの手を取りなかなか手を放せなかった。今度は良い先生にお世話になり有難いなあと微笑む姿。患者さんも親に認められたのは初めてだと益々自信を持ち、日々頑張る。受け皿も良く、半年後に退院に至った。

さすが清水先生は精神医療の先駆者だと尊敬する。人権尊重、精神医療はもっと開放的であって欲しい。

Drはもっと自信を持って医療にあたるべきだと思ふ。入院時の治療方針、治療経過に伴い、どの時期に入ったら、寛解の診断がされるのでしょうか。精神科には全治とはならない、退院の見込みに至ったら、社会に支援センターがあれば、其処で社会の訓練が施されるのではないのでしょうか。退院後の自立支援が大切だと思ふ。そうした機関があれば、入院医療費が削減できるのではないのでしょうか。

あの震災により、中通りの県立矢吹病院に避難された患者さん四十数名、その中で、要治療の患者さんは二名とか。他は

清水允照院長から

松本マサヨ様宛の便り

NHKの放送のあと、松本マサヨ総婦長からお便りをいただきました。ありがとうございます。書かれている文字が美しいので、まだお元気でいられると思い安心しました。

今から四十五年くらい前、松本さんと私は同じ病院で仕事をしておりました。松本さんほど患者さんのことを考えて仕事をされる人は滅多に居ないと思っていたので、あなたの仕事ぶりを私はよく眺めていました。

松本さんは若い患者さんに対してはご自分の子供のよう、年配の患者さんに対してはご近所の知人が友人に対するように、優しい声は強かったのですが、優しさと礼儀正しさがありません。したがって、興奮して乱暴な患者さんでも、松本さんの言う事はよく聞いてくれていました。

また当時は、ご家族から「入院させたいが、暴れているから自分たちでは病院へ連れて行くことができない。迎えに来て欲

しい。」と連絡を受けることがしばしばでした。このような場合、ご家族へ出向いても説得に数時間を要することが普通でした。強引に入院させようとする。我々のスタッフに怪我人を出してしまったり、患者さんの入院後の経過に悪い影響を出してしまふことになりました。どうしようかと考えていると「先生、行ってあげてください。」と松本さんは言っていて、臨機応変に行動できるスタッフを選んでくれました。

ある時などは妄想と幻覚に支配された患者さんが、出刃包丁や刺身包丁などを準備して、階段の上の2階で私たちを待ち構えていました。このときは、あまりにも危険なので、警察にお願いしました。機動隊員が4名来てくれました。助かりました。

時には松本さんも入院迎えに参加してくれましたよ。そんなこともあんなことも「今は浪速のことは夢のまた夢」のようにになりました。しかし、私の頭の中で「夢」にならなかったことが二つあります。それは、ある時のことでした。

食事を摂らない若い患者さんに「何故、ごはん食べないの?」と松本さんが聞きました。若い患者さんは松本さんの顔を見上げましたが、そのまま黙っていました。

この場面は今でも私の頭の中で繰り返し返されています。以下の①と②の疑問となつてです。

- ① 返事をするのが面倒になつて黙っていた。
 - ② 何故食べないのか自分でもわかっていなかった。
 - ③ 自分の意志による行動ではないのか?
- 以上の考えの経過の中で気付いたことを参考にして、考案したことが、「会話で気付いたことを、更にはつきりと気付かせること。気付いたことを次にどのように展開したらよいかを考えさせること」です。

- ① スタートラインに並ぶこと。
- ② 目標のゴール(走る区間)ごとに目標ゴールを設定)へ向か

入院必要なしといった状況を知ることができました。また入院歴の長い方では五十六年、まず驚きました。その患者さん達は三食昼寝つきといった気分の日々を過ごして居たのでしょうか?

伊藤時男さんは四十年近くの長期入院。でも彼には外部での作業療法があり、人格も損なわず現在に至っている。諸々複雑な心境もあったでしょう。今後現状を保ちつつ、一日一日を大切に過ごされます事を祈っています。

わたしも八十七歳の高齢者、誤字も多く文面も上手く書けません。これが私にとつての書面です。

乱文乱筆にて失礼いたします。

平成三十年二月九日

松本マサヨ



③走りきってゴールすること。

以上の①②③を用いて認知症を改善させることです。

Conversation (会話) → Goal (目標)ではなく
Conversation (会話) (区間)とのGoal + 仲間も参加してのGoal + 家族も参加してのGoal... → TotalとしてのGoalです。

以上の方法で対応すると、高齢者の認知症状は家庭でご家族が面倒を見ることが可能なくらいに改善することが出来るのです。過去三年間のデータ表を是非御覧ください。この結果は松本さんとそのスタッフの皆さんの対応法からヒントを得た結果です。有難うございます。

私にとって松本総婦長と隆雄さん、隆さん、繁子さん、繁美さん、その他の皆さんと仕事をできたことは幸せでした。

松本さん、本当にありがとうございます。ございました。

清水允照
二〇一八年四月十二日

おばあちゃん子病棟へ

田中 健司

私は現在院長の運転手を主に務めているが、運転から手が離れた時にはCGCチームの一員として勤務している。家族に見放されたと思いついで悲しんでいる患者さんがいれば、勇気づけ、生きる意欲を持つ助けになれるようにと病棟に向かう。それでも、逆に患者さんに励まされてしまうことが多かった。

今でこそ、患者さんに「今日も綺麗ですね。」と話しかけると「あら、あと何十年か若かったらあなたの嫁にいったのに。あなたの奥さんは幸せね。」と言われ笑い合えるようになったが、入職した当初は認知症の患者さんとの会話や対応はとまどいの連続だった。

ただ、私はいわゆるおばあちゃん子だったこともあり、患者さんとなじむのにそう時間はかからなかった。父方の祖母とは九十一才で亡くなるまで家族

認知症の母と

太田 泰代

認知症のことは、事故、事件などと同様に、毎日のニュースに載らないことがない状況である。その、認知症の母と二人暮らしになって三年になる。

母に認知症の症状が出るようになってから八年目を迎える。最初は家族みなで見ていたのだが、父が亡くなり、今では母とふたりになっている。

母の最初の症状は、よく言われる「物盗られ症状」、特にお金がらみで「お財布を盗まれた」「通帳、印鑑を盗まれた」などで、犯人はいつも父ということだった。また、物を隠すのが上手で、家族はそれをゲームのように探した。本人は盗まれないようにするためししまうのだから、探す方は大変である。父は探すのは上手でないし、母から犯人扱いされていて面白くないのだが、毎日のように、母をドライブに誘い、一緒に出掛

けた。父は母にできるだけ優しく、忍耐強く努力していたと思う。

この病院に勤務するようになって、いろいろな患者さんの様子を知ることができた。

ある男性の患者さんの奥様は、病院にみえると、毎回のようの外へ連れ出され、車からペットの犬を降ろし、一緒に病院の敷地内を散歩されている。お家にいらした昔のように他愛のない会話をされているのだろうと想像する。

また、高齢の女性の患者さんの息子さんは、仕事の休みのとき、患者さんの好物を持ってこられる。お食事の後でも、息子さんからの美味しいプレゼントを、喜んで召し上がっている。認知機能の低下された患者さんも、ご家族の声やふれあいで、懐かしさを感じておられるのが表情から読み取れる。

私も、母と二人生活になった当初は、お互い紆余曲折があり、

と一緒に暮らしていた。祖母は関東大震災を十七歳で体験し、戦中戦後の物のない時代を乗り越えてきた。そのためか、特に食べ物大切にしている人だった。私が子供の時は炊飯器の鍋も今の様にテフロン加工ではなくアルミだったので、飯粒が鍋いっぱいにつりついていて。祖母はその鍋に水を張り、しゃもじでご飯粒をこそげ落として鍋底にたまったご飯粒を手ですくって口に入れていた。私は、今の時代なにもそこまでなくてもと思つたものだが、患者さん方から戦中戦後の苦労話を聞くにつけ祖母のご飯粒をすくうシワシワの小さな手を思い出す。

先日、何年かぶりで小学校の同窓会があった。私たちの世代はそろそろ親の介護が問題になる時期にさしかかっている。そこで、「高齢者が願っていたこと、現在も願っていること、あきらめていたことなどの実現に協力できる人」など、院長がまとめた文章を一枚ずつ同級生に配った。すると、今までワイワ

イ盛り上がっていた会場が皆真剣に読み始めてしーんとなってしまった。隣に座っていた同級生は、「注意・命令・文句・愚痴・嫌味などを言わない人」の項目を指差し「俺は親父にこれとまったく逆のことをしてるなあ。これじゃ早くボケてしまうなあ。教えてくれてありがとう。」と感謝された。この新聞の読者の方々は認知症について知識や経験もおありだと思いが、まだまだ世間では認知症の方と実際に接したことがない人が多い。

四月二日の朝日新聞デジタル版に「朝日新聞は今後の記事で認知症の人の行動を表す際に「徘徊」の言葉を原則として使わず、「外出中に道に迷う」などと表現することにします。」とあった。

この記事を読み、院長が何年も前から勉強会などで「徘徊には理由がある。そして、その理由を理解して接する必要がある。」と述べられていたことを思い出した。院長が何十年前から認知症について唱えてきた

大変な時期もあったが、この病院で働きだして、さまざまな患者さんとのふれあいで分かったことの一つは家族の愛情である。今、母はデイサービスの送迎車に乗るとき、「お姉ちゃん、体に気をつけてね。風邪をひかないように」と今生の別れのように言う。流星、母は私のツボを心得ている。



(一病棟サポーター)

ことがやっとな今世の中に広まりつつあると感じた。徘徊の言い換えと同じように「優しい人」とはの教えが近い将来世の中に広まって行くと確信した。私はこれからも、一人でも多くの人々に富士山麓病院を知って頂けるよう努力していきたいと、笑顔を見せてくれる患者さんの顔を見つめて改めて心に誓った。(CGCチーム 秘書室兼任)



季節の小窓

俳句

大蟻の雨をはじきく黒びかり

星野 立子

牡丹の花に暈ある如くなり

松本たかし

草笛で呼べり草笛にて応ふ

辻田 克巳

観察

杉山 由紀子

病院の庭の土の上に、見覚えのある葉っぱが一枚、ある。どう見てもチューリップの葉だ。土の上に、茎のないチューリップの葉が、横になっている。それは一見、刈り取られ捨てられているように見えた。でも、生きている。ダリの、グニャつとした時計の絵画を見た時のように、一瞬、非日常の世界に足を踏み入たような感覚になり、心がざわついた。子供の頃、水栽培で、チューリップを育てたのだが、特に不思議に思ったことは、無かった。ただ単に、花が咲いたという事実しか、見ていなかったのかも知れない。

シェイク・オブ・ウォーターという映画が、アカデミー賞の作品賞を受賞したので、観に行つた。その時感じたあれつという感覚と、土の上のチューリップの葉を観たときの感覚が、似ていると感じた。この作品は一言で言うと、半魚人の男と、子供の頃虐待を受けた女との、ラブ・ストーリーなのだ。

の、ラブ・ストーリーなのだ。チラシを見たとき、ちよつと甘めのファンタジックなラブ・ストーリーだと思つた。しかし実際は、砂糖抜ききの、ブラックだった。主演のヒロインは、決して美人ではない女優さんをキャストイング。それは、監督のこだわった点の一つのようだ。社会からしいたげられ、生きている人々。異形の姿ゆえに、実験動物として扱われる半魚人。見捨てられたような世界の住人。でも実は、彼らの世界はとても生命に満ち溢れている。彼らを見下している人々には、その命のみずみずしさは、見えない。見たくないものを見るのは、エネルギーがいるから。

そして、半魚人という存在そのものにも、とても心魅かれた。というのは、小学生の頃に観た映画に、出てきたのだ。小学校の頃、年に1〜2回だつただろうか、映画会というのがあつた。当時はまだ、体育館というものはなく、講堂に児童が集まり、映画を見るのだ。授業時間に行われたこともあつて、とても楽しみだつた。そこで上映されたのが、『海底大戦争』だつた。そこに、半魚人が登場した。最初は、悪いやつだと思つて観ていたが、実は彼らはもともと人間で、悪い科学者に捕まり改造されてしまったのだ。それを知つて、とても悲しくなり、ストーリーは忘れたが、その不幸な半魚人のことだけが、記憶に残つた。

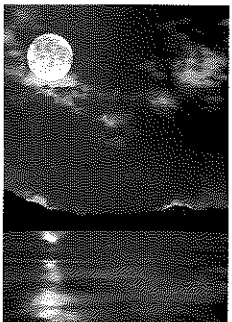
人魚やケンタウルスなど、物語には、人間と他の生命体が一体化した存在が、神話の世界の昔から、描かれている。そこには、何か祈りのようなものが込められているように、感じる。彼らは、もともと神々しい存在として、描かれていた。シェイク・オブ・ウォーターの半魚人も、その手を、薄毛で悩んでいる初老の男の頭に置くと、毛がはえてきたり、傷が治つたりする。神のような力がある半魚人だが、文明社会に居場所はなかつた。

もともと居場所のないものに、居場所を与えるものが、創造力なのだろうか。詩人金子みすゞは、「見えぬけれどももあるんだよ」と言つたが、実は、見

えないものの中でも、ある種のものの断片は、見えているのかもしれないあと、思う。ただそれは、ぱつと見が魅力的でなく、一見何の価値も無さそうなので、関心を寄せることもなく、スルーしてしまうのかもしれない。でも、通り過ぎるとき、何かを感じて振り返る人もいるだろう。

金子みすゞは、辛い一生を送り、昭和五年に、二十六歳の若さで自死している。見えないものの存在を確信して、それを受け入れても、その先の道は、舗装なんてされていないんだらうなあと、凡人の私は思つてしまふ。でも、平成の時代の「金子みすゞ」たちは、生きるという選択をしてほしいと、願わずにはいられない。

(薬剤師)



太極悠悠・143

中野完二

新潟市の會津八一記念館で「會津八一と吉野秀雄」展

高崎市の群馬県立土屋文明記念文学館で、昨年2017年10月7日〜12月10日に開かれた、「第98回企画展『ひとすじに真実を、ひとすじに命を』吉野秀雄・中野幸一郎往復書簡展」は充実した展示と図録で、好評であった。

この往復書簡展に続いて、新潟市の會津八一記念館で、「會津八一と吉野秀雄」展が、2017年12月22日から2018年3月25日まで開催されているとのことなので、今年3月13日、妻と二人で新潟市へ行き「會津八一と吉野秀雄」展を観てきた。

◎ 新潟市の會津八一記念館は、海べりにあつた旧館が、有名な萬代橋にも近い、新潟市中央区万代3丁目1番1号 新潟日報

メディアシッパ5階に移つている。ビル全体が、風をはらんだ大きな帆船のように、曲線を描いている。

元新潟日報社のベテラン記者で柏崎支局長、東京駐在もされた現在秋州会で発行している『秋艸』編集長の鈴木清一さんご夫妻が、會津八一記念館でお待ちくださつていて、展覧会をご案内くださった。ありがたいことである。そう広くない会場に、會津八一先生と吉野秀雄先生の稀有な師弟関係を具体的に示す数々の資料が展示されていた。私は、鈴木清一さんから頼まれて、新潟日報の「日報を讀んで」という欄に、月に一回短文を書くという経験をさせていただいた。1997年秋から1998年春の間の半年間新潟日報の朝刊夕刊を欠かさずに熟

読んだ。新潟日報のために、あるいは新潟日報読者のために役に立つたのかどうかかわらないが、「會津八一先生の常設欄を提案」したり、「文化性、格を高めた連載」など率直な感想を書かせていただいた。見出しの省略や写真のトリミングについて不満を述べたこともあつた。そんな昔のことが思い出されたりした。

◎ 會津八一記念館では、歌誌『砂丘』編集発行責任者の萩原光之さんと、偶然お目にかかれたのもうれしかった。吉野秀雄師心忌世話人会のことやら少々立ち話。萩原さんは佐渡から来られていた。

◎ 會津八一記念館では、阿部邦夫・阿部恵子さんご夫妻と久しぶりにお目にかかるのも楽しみだつた。拙宅・深大寺の近くにお住まいだつた方で、阿部邦夫さんの定年にもない、故郷新潟に戻られた。阿部恵子さんは東京駅大丸で消費生活アドバイザーと

して活躍されていた方。深大寺でも太極拳に親しみ、新潟に来られても、日本健康太極拳協会新潟県支部の方々と太極拳を楽しんでいるとのこと。

◎ 新潟の、その昔北前船に携わつたことのあるような、美しい大邸宅に案内していただいたり、雛飾りを拝見したのち、懇意にされているお寿司屋さんでご馳走になつた。久しぶりの阿部さんご夫妻との歓談は、うれしい、楽しいひとときだつた。お寿司もお話もおいしかった。

◎ その晩、ANAクラウンプラザホテルに泊まって、翌3月14日、萬代橋を渡つて、やすらぎ堤にある吉野秀雄先生の歌碑（2013年7月20日建立）に再会したい、と願つていたが、やすらぎ堤は補修工事のため登れなかつた。やむなく、歌碑背後のホテルオークラ新潟へ行き、レストランで生ビールを飲みながら歌碑を拝した。歌碑を背後から見るのは初めてだつた。歌碑とメディアシッパの立ち向かいようが再確認できた。

藪覗みカメラ世相④

内藤真治

いやなものはいや?

群馬県の県庁所在地である前橋市の郊外を車で走っていたら下派手な立看板が目飛び込んできた。とつさに写真を撮れなかった。後日改めて撮影に出かけた。ほかにも数か所同じものが立っている。



よほど豚舎の建設が迷惑とみえる。誰しも現在の快適な住環境が一変してしまうとなれば「歓迎」とは言えないだろう。豚舎ならいざ知らず、これが公的な施設となると厄介だ。斎場やゴミ・産廃処理場などは人々の暮らしにとって必要なものとは誰もがわかつている。しかし自分の家の近くにできるとなると「絶対反対!」なのだ。近頃は「子どもの声がうるさいから」と保育所の新設に反対する人がいるのだとか。自分にも子ども時代があったのを忘れてしまったかのような言い分。日本には昔から「おたがいさま」という言葉があるのに「それだけ世の中に余裕がなくなっているということだろう。でも通る人が思わず笑ってし

まう「死んでも大反対!!」のユーモアは大切。ケンカ腰にならずうまく落としどころに達するのではないか。こんなことで死んだらそれこそ「トン死」だ。

*

江戸時代に離婚請求権のなかった妻は、鎌倉の東慶寺か上州新田郡の満徳寺に駆け込めば二年後には自動的に離婚が成立した(縁切寺・駆込寺)。西洋にも「アジール」という権力の及ばない避難所があったらしい。現代日本にも各地に縁切神社や縁切寺がある。お嬢さんが奉納された絵馬を熱心に読んでいるのは東京都板橋区にある三代目の「縁切榎」(榎大六天神)。若い女性の参拝は悪縁を切りた

いより「良縁願望」が多い。切りたいのはDVや夫の浮気に悩む夫婦の縁とは限らず、職場の上司・同僚や隣人などとの別れを切望した文面にさまざまな人間模様を想像させられる。相手と自分の住所、氏名を明記したものが多く(匿名や仮名では御利益がないそうで)、も



俳句のことば発掘 14 関塚康夫

百合根余話(その十二) ウバユリの実と出あう

祖の命の糧・姥百合という一節を以前したことがある。旧年の秋、ウバユリという懐かしいことばを旅先で聞き、花どきは過ぎていたが、その物の姿を心に刻んだ。本稿はその辺りの経緯から、記してみたいと思う。

稲城で秋口から師走頃まで咲くタカサゴユリは、草丈が、環境に応じて、実にダイナミックに変わり得るからである。ここ数年、歩きながらの路傍のユリの丈観察だけでも、八尺〜一尺未満と、大きな変動があったからである。

おくのほそ道の吟行会で、松島海岸を歩いていたら折、路傍のプランターで見つけたのが、青いずんぐりとした実を、真つ直ぐに捧げた姿のウバユリであった。「あつ、ウバユリだ」との小さな叫びを聞いたので、しばし見つめたのだ。

(一) 昨年生まれた百合の句 俳誌「寒雷」十二月号に <姥百合の莢あををと着着と入る 板倉 博子>

それは白露の頃。今から半年程前だが、タカサゴユリ、テッポウユリより図太い実の印象が鮮明である。

偶然の両句との出会いだが、記録しておきたい。前後するが、板倉氏の句は奈

丈は尺余。野生のものより、かなり小さいと思つたが、これは驚くにあたらない。私の今い

良で詠まれたものであろうか。何れにしても、高砂百合の盛況を伝えつつ、同時に魂しずめの念も込められているように思われ、味わい深いものがある。

(三) ユリの記の反省 タカサゴユリのたくましい環境適応性には、先に記したように目をみはるものがある。その側面に私は少々酔つてはいなかったか、とこの稿を書きつつ、やつと気づいたところである。

結論からいえば、私が純粋なタカサゴユリの北上と思ひ込んで、手放して喜んでいたことは科学的ではない。片手落ちの味方であったように思われる。ものの本を読むと、近年、新テッポウユリとして、テッポウユリとタカサゴユリとを交配したユリの種子が出回っているからである。

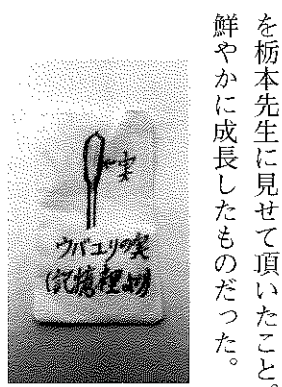
また、タカサゴユリとの自然交雑により、純粋なテッポウユリが駆逐されつつある、との危惧を、生物学の専門の方から聞くことがあるからである。

注・本シリーズで、私が路傍で出会いタカサゴユリと記してきたユリは、花の色の内側が白色、外側が紫褐色を帯びる、という外観的特徴に基づくもの。だが、この基礎がぐらぐらしていたのである。

(四) ラ・ニーニャの冬に 昨二〇一七年後半から今年の二月頃までの、全国的あるいは世界的気象異変は、どうやらエル・ニーニョの逆現象ラ・ニーニャ(スペイン語で、女の子、の意)によるもの、と。

多雨、寒冬が特徴の異変は、大雪を招き農作物などへの影響が今もつづいている。そんな中で心に灯が点じられた一件がある。

厳冬の副産物、平地の公園で撮り得た、霜柱草の見事な写真を板本先生に見せて頂いたこと。鮮やかに成長したものだ。



俳言楽音 20

川村研治

星のおしやべり

冬の間は、天狼星、オリオン星座、冬の大三角形がみごとだった。星を見てみると、いつも、「星のおしやべり」、そして「星のおしやべり」や「ちやくちやく」という俳句の断片が記憶の中から浮かびあがってくる。調べてみるとそれは、松本たかしの

「雪だるま星のおしやべり」という俳句であった。ゆきだるまを見下ろすように、雪の止んだ後の夜空いっぱい星のまたたく様子が思われる。それを「星のおしやべり」と表現した、作者の豊かな想像力が素晴らしい。

◎ 見えないものを見、聞こえないものを聞きとめるという想像力は俳句作りのうえで、大切なものであるが、この、

想像力というものは、人と人との付き合い方の上でも大切なことだろうと思う。ふだんの会話の中で、交わされる言葉は人の心のなかに存在する思いのなかのごく僅かなものである。言葉になっていない、身振りや顔つきなどから、想像力を駆使していなければ、人の気持ちをつかむことなど出来ないと思う。

◎ 気心の知れた人同士であれば想像力を駆使するまでもないだろうが、いったん心を閉ざしてしまった人との会話はいかに難しいか想像に余る。

◎ 言葉による人の心を開かせることの難しさに比べて、音楽には、それを可能にする力が備わっていると思われる。ゆるやかなメロディーの流れやハーモニーに浸されている

とき、人の心はあたたかな雨に芽吹きが促されるように、無意識のうちにこころが開かれていくように思う。

俳句の場合も、そこに書かれていた意味というよりも、読み上げられたときの、音のひびきの美しさが、すぐれた作品としての大切な要素の一つである。俳句にしても、短歌にしても、作品を作ること

を「詠う（うたう）」あるいは「詠む（よむ）」という言葉を使うが、このことから本来これらが読み上げられたときの、耳から聴くことを重視していることがわかる。

◎ 声に出して人に自分の思っていることを伝え、また、ひとの声を聞いて他人の思っていることを受け取ることで、更には、聞こえない星の声を感

じることでできる詩心の素晴らしさに改めて思いが及び、にんげんというものの可能性の限りなきを思う。

編集後記

今年の桜は大変すばらしかったが、それもたちまち過ぎ去ってしまった、緑したたる青葉の季節になっている。

今回は、清水先生と松本マサヨさんとのお便りの交換を載せさせていただいた。人と人が力を尽くして仕事をしているときのあたたかい心の交流が感じられ、大変感動させられる。

病院の玄関ホールに雛人形が飾られ、そして、雛納めとなり、今は五月人形が飾られている。この端午の節句にはいろいろな由来があるようだが、今では子どもの日としての方が一般に広まっている。子どもたちのためにも、平和で豊かな国に行かなければならないとつくづく思う。五月の風の中で鯉のぼりのひるがえっている、風薫るよき季節をありがたく思う。今回もだいぶ遅くなってしまったが、新聞の第一五四号をお届けしたい。

(川村研治)